

# 白鷺教育会 明石支部 だより

発行  
白鷺教育会明石支部  
令和4年7月1日(金)

## 「いい加減」を許容する寛容な風土を

会長 中尾 幸雄

今年度も総会を開催することができませんでした。総会は、会員が一堂に会し、会の方針を共通理解するとともに情報を交換して親睦を深める年に一度の大切な機会ですので、心より残念に思います。来年は開催できることを祈念するばかりです。

支部規約では、評議員会で「規約の改正・役員を選出、事業計画及び予算決算など、重要事項を決議する」こととなっており、これらは5月17日の評議員会において決議されています。同封しております「令和4年度 活動に関する資料」に掲載しておりますので、お目通しいただきご理解とご承認をお願いいたします。

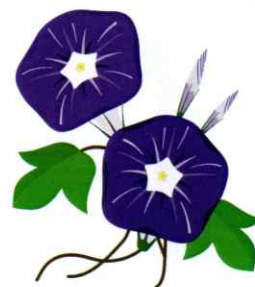
さて、昨今マスコミに学校の過酷な勤務実態が取り上げられる機会が多くなり「ブラック職場」のイメージが強くなって教員志望者が減ったり、精神疾患で療養する職員が最多になったりと憂うべき問題が話題になっています。「働き方改革」が叫ばれ、事務の効率化や会議の見直し、部活の地域や民間への委託が進みつつあり、好ましいことのように思いますが、問題もはらみ、課題も山積して一朝一夕には進みそうにはありません。

給特法により勤務時間の管理が疎かになっていることは否めませんが、一般企業のように時間を気にし、制限もされるというのはいかかなものかと危惧します。何時までには帰らないといけないとなると結局仕事を家に持ち帰ることもなるでしょうし、思うように仕事できないという不満も出てくるでしょう。私が若いころは、確かに今よりは時間的にも精神的にもゆとりがあったように思います。会議も事務も少なかったような気がします。確かなのは、今よりも全てが緩やかで寛容だったことです。あえて俗な言い方をすれば、「いい加減」なことが多かったように思います。自由で少々の失敗も許される雰囲気があったのびのびと思い切ったことができたように思います。

今は、社会全体が不寛容な時代。完璧を求める時代。失敗したり完璧でなかったりすると責められる時代です。学校も完璧を求め過ぎていないでしょうか。完璧を求めるがために多忙になっていないでしょうか。失敗を恐れるあまり慎重になり過ぎていないでしょうか。窮屈になっていないでしょうか。

大事なことは、職場が開放的で風通しが良いこと、寛容で「いい加減」が許容される雰囲気があること。完璧でなくてもある程度できれば良しとする価値観が共有される職場。疲れても温かくて癒される職員室があり、悩みを語り合い励まし合う仲間がいる職場では精神的に病む人は出てこないでしょうし、のびのびとした活気ある職場になるように思います。

「働き方改革」は、単に長時間の勤務を短くするという時間の問題ではなく、学校文化や風土を根本から変えていく「大改革」なのではないでしょうか。この「大改革」が前進し、学校が働きやすく働きがいのある魅力ある職場に変容していくよう期待します。





## 高丘小中一貫教育校開校から1年

明石市立高丘西小学校  
校長 金井 一郎

明石市では、学びと育ちを継続的に進めることができる小中一貫教育を計画的に進めるため、市内の中学校区ごとに就学前教育機関、小、中、特別支援学校からなる「校区ユニット」を設置し、それぞれの校種間で連携し、校区ごとの教育課題に沿った取組を進めてきました。

その中でも、高丘中学校区では、平成28年度から、これまで先進的に小中一貫教育の研究に取り組んできました。そして、令和3年4月より、高丘中学校、高丘東小学校、高丘西小学校の3校を併設型小中一貫教育校として開校することとなりました。

開校1年目、コロナ禍により教育活動に制限もあり、予定していた計画が中止になることもありましたが、中学校教員による小学校への乗り入れ授業や全学年30人程度学級編成、小学校1年生からの外国語活動の充実、県立明石北高等学校との交流、通学区域特認校制度の導入、全教職員の高丘小中一貫教育校への兼務発令など、特色ある教育活動や制度を取り入れ推進してきました。

開校2年目となる今年度は、さらに小小連携及び小中連携を密にし、義務教育9年間の系統性・連続性を意識した教育課程の編成や特色ある取組等を検討・推進していきたいと思っております。



## 校則見直しの歩み

明石市立錦城中学校  
校長 谷郷 昌弘

「ブラック校則」という言葉がマスコミに登場し、世の注目を集めるようになったのが2018年ごろかと思っております。「時代に合わない」「理不尽で厳しい」など、中学校や高校の校則に批判の目が向くようになっていきました。できた当時は意味のあるきまりであったはずの校則も、多様性を尊重する社会の変容に合わせ、見直しの機運が高まりました。

明石市の中学校でも校則見直しの機運は高まり、これを受けて錦城中学校で取組が始まったのが2020年。他の中学校でも同様に見直しが進められていく中、前校長先生の指導のもと、生徒指導担当を中心に見直しの過程を明確にしました。

「きまりについて考える会」と名付けられた集まりは、生徒会執行部（新旧）、PTA本部役員（新旧）、生徒指導部会の教員（管理職含む）と結構な大人数で構成され、小グループで意見を出し合っては全体に発表するといった形式で、令和2年度から3年度にかけて4回開かれました。そして最終原案を、学活で全クラスで検討し、ようやく完成を見ました。



見直しの過程では、大人たちは「制限をしなくてもよいのではないか」という方向の意見が多い中、生徒からは「何でもありは問題がある」という意見が出て、ある意味、新鮮な驚きも感じました。「自分たちのルールを自分たちで作る」という責任感と真剣さが感じられ、大変うれしく思いました。

施行から半年以上が経ちましたが、当初懸念していた「荒れ」や「崩れ」が見当たらないのも、三者がともに作りあげた成果ではないかと感じています。



## 大学附属での学び ～ネットワークと多様な価値観～

明石市立貴崎小学校

校長 中野 裕香子

昨年度までの三年間、兵庫教育大学附属小学校で副校長として勤務しておりました。附属への異動については、東浦町、姫路市、明石市と異動をしましたので同様に想像しておりました。ところが異動すると、驚きと不安の連続でした。所属する教育委員会がありませんので、教員人事や約160人の実習生の受け入れ、文部科学省や他府県市町の教育委員会などへの出張、他附属との交流、入学者選抜、変形時間労働制など、初めてのことばかりでした。しかし、ゼロから出発する私に多くの方が温かく親切に接してくださいましたので、真摯に取り組みました。また、働き方改革や全学年教科担任制の導入、教育課題については苦労もありましたがその対応を学ぶことができ、良い勉強にもなりました。

異動の際、「ネットワークを広げておいで」「新しい研究を学んでおいで」等、お声かけ頂きました。ネットワークについては、県内外の行政機関へのお出張が多く初めは緊張しましたが、何度か足を運ぶ中で親しく話せる方々が増えました。大学教員・事務の方々との交流や連携研究もあり、自分の中に多様な価値観が広がっていくことを実感しました。

近年、社会は包摂と多様性がもたらす持続的な発展に向けて動いています。OECDの「2030年に向けた学習枠組み」に、社会を変革し未来を作り上げていくための主な資質・能力として①新たな価値を創造する力②対立やジレンマを克服する力③責任ある行動をとる力があります。未来を生きる子どもたちに培っていききたい資質・能力です。これらの力は、自分とは異なる価値観をもつ様々な人との温かい出会いの中で育つと考えます。私にとって附属での三年間は、新しい仲間や価値観との出会いがあり、非常に有意義で価値のあるものでした。加えて、この白鷺教育会に入会させていただいてからの経験でもネットワーク・価値観は広がりました。

これからも自分の中の風通しをよくして多様な価値観に出会い、それを受け止めて、校長としての資質と能力を高めていくと共に、人としての度量を広げていきたいと存じます。



## 覚悟と初心を忘れず

明石市立和坂小学校

教頭 上田 哲史

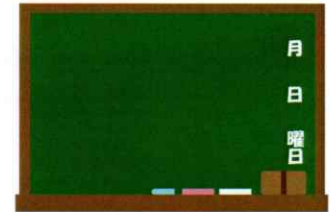
辞令交付後の職員室で「夢と希望を持ち、心豊かに自ら学ぶ子どもの育成」という学校目標を達成するために、校長先生のリーダーシップのもと、『和』『夢』『対話』『地域』を率先垂範で実践したいと考えています。子どもたちの笑顔があふれ、先生方の良さが活かされ、地域に愛される学校を支えていける存在になれるように、誠心誠意努力します。皆様これからよろしくお願ひ致します。」と、着任の挨拶をしました。挨拶後、椅子に座った時、これまでと見える景色が全く違い、武者震いしたことを覚えています。

教頭になって最初の1か月は、初めて見る文書に軽重や優先順位がつけられず、目の前の業務を一つずつ片づけることに必死で、戸惑いの連続でした。校支援（明石市内の学校で本年度本格稼働し始めた校務支援システム）の膨大な情報量の文書管理に加え、保護者対応、PTA対



応、コロナ対応、地域連携等の渉外により、8時に手を付けた仕事が3時になってやっと1つ終わり、朝より仕事が増えていることも多々あり、焦っている自分がいました。「激務」と言われる本当の意味を知りました。しかし、周囲の先輩方から教頭としての心構えや、励ましや電話・メールをいただきました。多くの方々に気にかけていただいたり、わからないことを尋ねると優しく教えていただいたり、周りの方々に支えられて、感謝、感謝で何とか乗り切ることができた1か月でもありました。また、先輩の教頭先生の偉大さを知った1か月でもありました。

6月になり少しだけPCから目を離し、前が向けるようになりました。職員から「教頭先生」と声をかけられると、必ず手を止め、笑顔で話を聞くようにしています。電話対応は情報の宝庫であり、学校経営の有益な情報が集まる仕事だと考え、1番に取るようにしています。特に、保護者や地域からの要望は、素早く対応し誠意を示すことが大切であると考えています。教諭時代には見えなかった、学校を支えている様々な立場の人々の仕事内容など広い視野で教育を考える大切さにも気付きました。まだまだ不慣れで戸惑うことも多々ありますが、全てのことが勉強だと思って、新鮮な気持ちで、楽しく充実した日々を送っています。今後は、冒頭の挨拶を実践するために、管理職になると決めた覚悟と初心をいつまでも忘れないように、職務に邁進したいと考えています。



## 笑顔忘れず

明石市立高丘西幼稚園  
園長 今村 圭子

退職する最後の年は、どんな気持ちで過ごすのだろうか、数年前から漠然と考えていましたが、そんな感慨にふける暇もなく、時は過ぎていきました。当たり前が当たり前でなくなり、今まで普通にできたことが、どんなにありがたいことだったのかを痛切に感じた最後の2年間でした。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今までのようにはいかない中、学校では子ども達のためにと、教職員で知恵をしばりながら教育活動を進めていきました。時間と労力を要しましたが、今まで例年通りとやってきたことを、見直すチャンスでした。

また人と人のつながりの大切さを改めて痛感しました。どうしたらよいかと悩んだ時は、校長先生方との情報交換の中で、数々のご示唆をいただき、自分の考えに確信を持って前へ進むことができました。諸先輩方からの励ましのお言葉も大きな力となりました。

令和元年度から、県の女性校長会の役員として県内の校長先生方と、令和3年に行われる全国大会兵庫大会の開催に向けて会議を重ね、準備してきました。しかし感染防止に歯止めがかからず、2年連続の紙面開催に追い込まれました。しかし、一歩進んだ提案をという思いで試行錯誤を重ね、予定していた一部をライブ配信という形で行うことになりました。当日は、Zoomを使って双方向のやりとりができ、全国の校長先生とつながっていることが実感できました。柔軟な発想と団結力で困難を乗り越えた気がします。

多くの人々に支えられ、無事38年間の教職生活を一旦終えることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。4月1日から、幼稚園長として新たなスタートを切りました。これまでの経験を今度は幼児教育にいかし、子ども達の笑顔と健やかな成長のために、心新たに進んでいきたいと思えます。「ピンチはチャンス」と何事も前向きにとらえ、笑顔を忘れずに！

